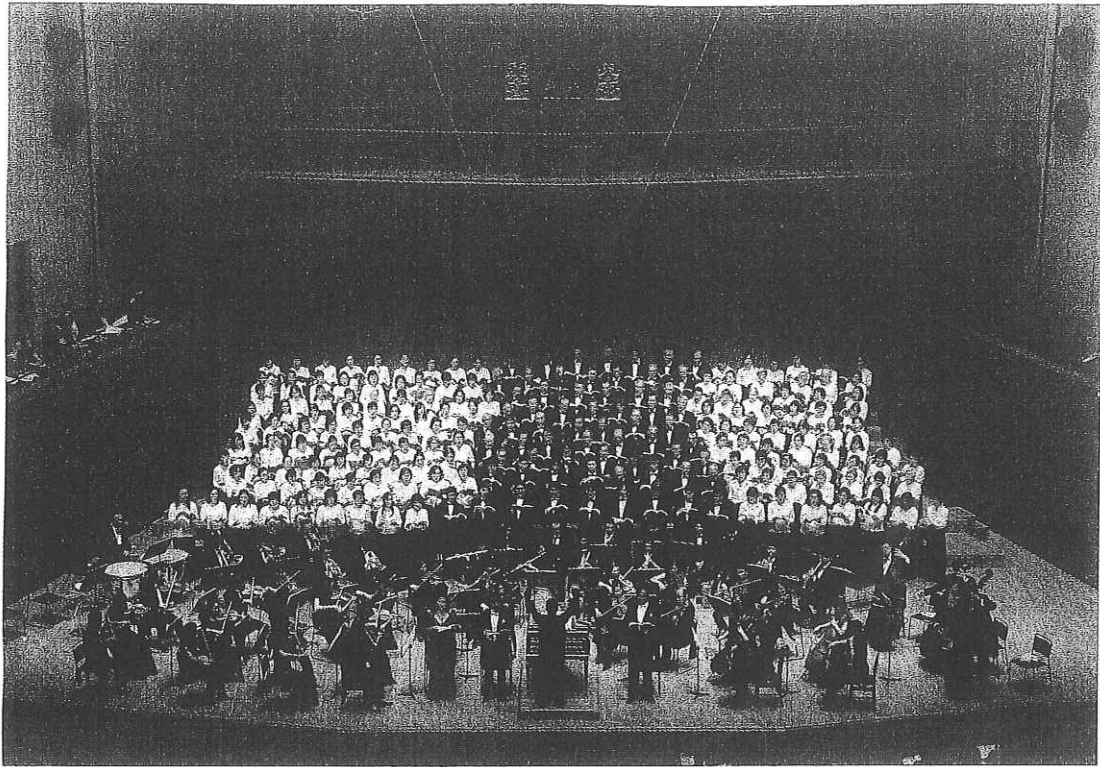


# Criticize a Concert

演奏会批評～2009年11月21日～12月20日（一部11月20日以前のコンサートあり）



東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団（©スタジオ・スペース・フォト）

◆東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団 第26回定期演奏会

ハイドン没後200年記念としてオラトリオ「四季」が演奏された。指揮は音楽監督・常任指揮者の三石精一、独唱は佐々木典子（S）、経種廉彦（T）、久保和範（B）、合唱は

東京ユニバーサル・フィルハーモニー混声合唱団。「四季」はハイドンの機智に富んだ性格と熟達した作曲技法が生んだ傑作だが、何故か演奏の機会は多くない。農民の一年を描く平易で円満な音楽に見えて、実は「神の愛」を謳い、叡智に迫る深遠な

内容を持つている作品だ。今回の演奏はその点で十分に満足のいくものだった。まず、三石の積極的な造型に驚かされる。速めのテンポを一貫、曲の長さをまったく感じさせない。それでいて、人々の喜びや悲しみ、ドラマ性、心からの祈りの表情は濃

やかに描かれる。また、オーケストラがとても温かい音色でそれに応えるのもいい。独唱も夫々人を得て好唱。合唱は最初こそ動きが鈍かったものの、徐々に歌い込みの成果を發揮したようだった。（12月5日、東京芸術劇場）

（保証裕史）

北海道、東北、

関東、東京音楽界

オーケストラ